




身近な森のいきもの展

～じつはいっぱい!こんなちかくに野生動物～

協力 フィールドソサイエティ (法然院森のセンター)



わたしたちが暮らす街のすぐ近くの森には、どんな動物が生息し、どのように生活しているのでしょうか？

身近な自然の豊かさ、動物のたくましさ、そして街との境に位置する森が抱える問題についてご紹介します。

写真展の開催にあたって

動物園より

京都盆地は三方を山に囲まれています。

普段、目にすることは少ないかもしれませんが、その森の中では様々な生き物が生活しています。

実際、何度か足を運び、注意深くあたりを観察すると、動物の痕跡を見ることが出来ます。

京都市動物園 生き物・学び・研究センターは、2021年7月より、環境学習活動を行う市民団体フィールドソサイエティの協力を得て、東山連峰の一つである大文字山の山麓に位置する善気山（ぜんきさん）の森で、特別な許可を得てトレイルカメラを利用したモニタリングを開始しました。

今回はこれまでの調査で見えてきた、京都市の街に隣接する森に生息する野生動物の様子を、みなさまにも知っていただきたく、身近な森のいきもの展を企画しました。

少しでも動物たちの存在を身近に感じていただけたら幸いです。

フィールドソサイエティより

京都市動物園から東を見ると、身近な山々に豊かな森が広がっています。その一角でのトレイルカメラでの撮影を通して、大都市の近くにも多くの野生動物たちがいることが確かめられました。

動物園の『京都の森』エリアとつながるように、様々な動物たちの暮らしが展開しているのです。動物たちは、何を食べ、どのような一生を過ごしているのでしょうか。

動物たちの暮らしを知ることは、それを支えている自然環境を知ることにつながります。身近な動物たちの姿を通して、身近な森の保全やまちづくりを考えていきたいものです。

ほにゆうるい 哺乳類 mammal

ホンシュウジカ



シカは全国的に増えており、善気山も例外ではありません。森林内ではシカの食べない植物を除き、下生えはほとんどなくなっています。

共存のために、森林内に防鹿柵（『京都の森』エリアのツキノワグマ舎周辺でも展示）を設置していますが、まだまだ工夫が必要です。



だいたい5～7月に出産します。

春に生えてくる夏毛にはおとなも子どもも斑点模様があります。



オスだけに生える角は、毎年3月ごろに脱落し、新しく生え変わります。

年齢によって大きさや枝分かれの数は変わります。

4つに分かれている、このオスは4歳以上である可能性が高いです。

ニホンイノシシ



出産は通常春に1回ですが、春に出産しなかったメスは秋に子どもを産むことがあります。

小さい子どもにはウリ模様があり、森の茂みにまぎれることができます。



イノシシの体は湿って泥まみれ。寄生虫対策などで泥浴びをします。

地下茎や根、ミミズや昆虫を食べるために地面をたくさん掘ります。

ホンドタヌキ



都市化への適応性が高いためか、山の下の方でよく撮影されました。
冬にむけてタヌキは、ぽてぽて&もこもこ。

ホンドギツネ



肉食性が強い雑食性で、餌を求めて住宅街に出てくることもあるようです。

ニホンアナグマ



ニホンアナグマは春頃に1~3頭の子どもを出産します。
この日は、4頭一緒に動いているのが撮影されました。

ホンドテン



冬毛でもここのホンドテンです。
黄色っぽい色です。
夏には、茶色い色の毛におおわれたスリムな体になります。

ムササビ



珍客来たる!
樹上生活しているムササビが、珍しく地面を移動しているのを撮影!

ニホンザル



ごくまれに訪れるニホンザル。
写っても1~2日でどこかに行ってしまう。